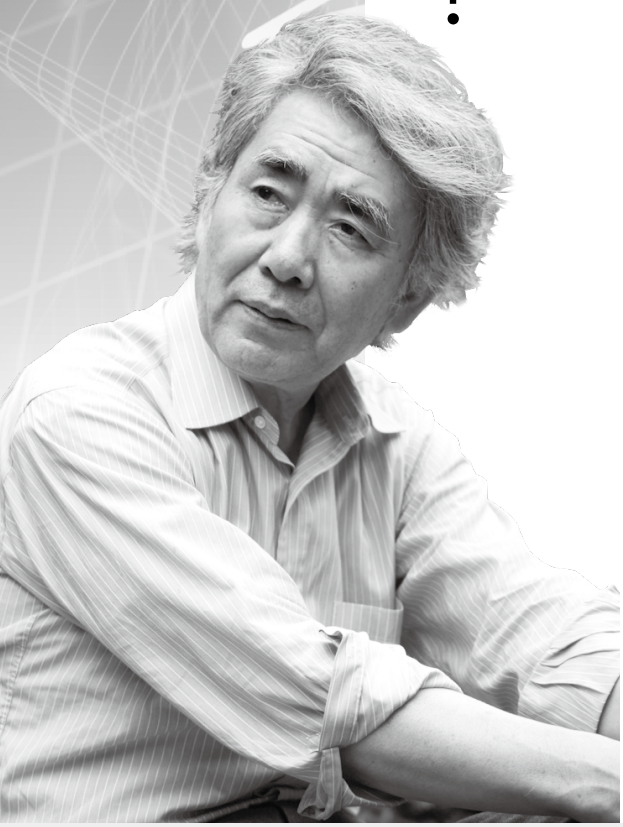
学術の風景

Vol.33

「啓発」の意味を取り違えていないか？

永田和宏



私が京都大学に入学したのは、昭和41年（1966年）。物理をやりたくて、湯川秀樹先生がおられた京大理学部に入学したのだった。幸い、湯川先生の最後の年の講義に間に合い、三回生の一年間を基礎物理学研究所（通称、湯川研）のサロンのような講義室で、「物理学通論」の講義を受けることができた。

物理学には落ちこぼれてしまったが、そして肝心の「物理学通論」で湯川さんが話された内容はほとんど忘れてしまったが、「ホンモノの湯川」の講義を一年間受けたんだという事実は、その後の私の研究者人生の奥深くに仕舞われたまま、しかし、どこか故のない自信となっていたような気がする。

このあたりの物理に落ちこぼれざるを得なかった事情については、最近出版された『あの胸が岬のように遠かった』（新潮社）のなかに縷々書いているのでここでは繰り返さないが、この少し前、入学式の総長告辞のことを記しておきたい。

当時の総長は、第17代奥田東総長であった。確か、入学式の総長告辞の冒頭だったような気がするが、奥田先生の言葉には度肝を抜かれた。

曰く、「京都大学は諸君に何も教えません」。

エエッーというわけである。せっかく頑張って京大に入ったのに、京都大学は何も教えてくれないと言う。あまりにもインパクトが強すぎて、そのあとの展開は何も覚えていないが、たぶん自分で知ろうと努力しなければ、何も学ぶことはできません、とか何とか、そんな脈絡だったのだろう。

しかし、このいきなりの剛速球には、驚きを通り越して、鳥肌が立つような興奮を覚えたのをはっきりと記憶している。そうか、これまでのように、黙って講義を受けていれば、知識は自然に得られる、覚えるべきことは向こうから自動的にやってくる世界とは、まったく違う世界に自分はいま足を踏み入れようとしているのだという、心躍るような興奮であった。

自分はいま、高校までの「学習」に別れを告げて、まさに「学問」の世界に足を踏み入れようとしているのだと、はっきり意識させてくれたのが、奥田総

プロフィール
永田和宏（ながた　かずひろ）
JT 生命誌研究館館長、京都大学名誉教授、
京都産業大学名誉教授
専門：細胞生物学

長の、入学第一日目の言葉だった。それは大学の四年間（私の場合は、正確には五年間だったが）、折に触れて思い出す言葉となった。その「自分で求めなければ……」という言外の意味は、折々の私を規定する言葉となっていたような気がする。

私はいまの大学教育が、教えるということにあまりにも熱心になりすぎていると思っているものである。教えすぎていると言ってもいい。このあたりは、もっとゆっくり論じなければならない問題ではあるが、〈知〉というものは、〈求めて得たもの〉でなければ身に付かないものだということを、大学の教師はもっと真剣に考えるべきではないか。「求める」とは、知りたいと思うこと以外ではなく、「知りたい」という思いは、「問い」を発し、それを自ら抱え込むという意識を外しては起こり得ないものであろう。

子曰、不憤不啓。不悱不發。
舉一隅不以三隅反、即不復也。述而七－八
子曰く、憤(ふん)せずんば啓(けい)せず。悱(ひ)せずんば発せず。一遇(いちぐう)を挙げて三隅(さんぐう)を以て反(かえ)らざれば、即ち復たせざる也。

孔子の言葉である。「知りたい気持ちがもりあがってこなければ、教えない。言いたいことが口まででかかっているようでなければ、導かない」というのは井波律子さんの訳（『完訳論語』岩波書店）である。憤すは、知りたいと身悶えするような様子。悱すは、口まで出かかっているのに表現できなくて、これも身悶えしている状態である。それくらいでなければ、「啓せず」「発せず」と孔子は突き放すのである。

よく知られているように、これが「啓発」の由来、典拠である。「啓発」と言うと、すぐに「知識をひらきおこし理解を深めること」（広辞苑）、「（専門家としての観点から）一般の人が看過しがちな問題および問題点について、知識を与えること」（新明解国語辞典）などと解されるのが普通だろう。しかし、その典拠となる「論語」において孔子の説く「啓発」は、それらの意味とは正反対ではなかろうか。

孔子は、求めなければ、与えてやらないという方を強調しているとしか読めないのである。〈知〉というものは、身悶えするようにそれを欲していなければ「教えてやらない」と言い放っているのだ。「啓発」の意味が、熟語として定着していくどこかの過程で逆転したとしか思えない。

相手が求めてもいないのに、一方的に親切心を起こして教えてやろうとするのは、啓発でも何でもないと孔子は言っている、のかどうかは彼に聞いてみないとわからないが、「不啓」「不發」の強い口調からは、孔子の思いは自ずから明らかであろう。相手が求めてもいないのに、一方的に「啓発」と称して教えようとするのは、おせっかい以外のものではないと孔子は言いたいのだ。そして、私もそう思うのである。

孔子のそんな思いは、「舉一隅不以三隅反、即不復也」によりいっそう明らかである。一つの隅について説いてやったら、あとの三つの隅については、こうですよねと返さないような奴には、二度と教えてなんかやるものか、と言うのである。一つを教えたら、残りの三つは自分で考えて答えを探す、それが学問だと孔子は言いたいのである。まことに過激な教育論であるが、教師なら一度は言ってみたいような言葉でもある。そして、それこそが真の教育というものではないかとも思うのである。

「知へのリスペクト」ということを考える。いかなる分野であれ、「知」というものに対するリスペクトは、自ら知りたいと思い、それを先人が苦闘の末に獲得してくれたものであることを知ることからしか生まれ得ないものである。知りたいとも思っていないのに、向こうから勝手にやってくる「知」に対して敬意を抱くことは、誰にとってもむずかしいことだ。教育に限らず、教えすぎるということは、「知へのリスペクト」を限りなく希釈していくことにほかならないということに、私たちは思いをいたしておくべきであろう。